

発行

日本共産党
佐野弘美事務所
北区北20西5 2-27
Tel 011-790-6411
Fax 011-790-6412

日本共産党 道議会議員

2017年5月 第23号
月刊
いきいき道政報告

佐野 弘美

標茶高校を訪問

4月24日、深見迪(すすむ)・渡邊定之両標茶町議とともに、道立標茶高校を訪れました。

昨年2月、道議団で標茶町を訪れ、同校に釧路養護学校高等部の分校設置を求める要望について懇談した際、標茶高校の視察を要望されていたことが今回実現しました。

敷地面積日本一の高校

標茶高校は、牛60頭を飼育する酪農施設をはじめ、食肉加工、乳製品加工、製菓、製パンの実習施設など、豊富な設備を有します。また、総合学科として多様なコース、科目から選択する授業が多く、自ら課題を見つけて取り組む研究発表にも力を入れていました。

就職希望者から国立大進学を目指す者まで、多様な生徒が学び、ADHDや精神発達遅滞など、特別な支援や配慮が必要な生徒も多く在籍しています。生徒同士が

助け合うピアサポーター認証制度があるなど、生徒同士が互いに認め合い、支え合う校風が根づいていました。

三上拓志校長は、「中学時代不登校だったが、標茶高校で学び大学に進学した生徒がいる。一人一人に合った教育環境を提供したい」と熱く語りました。

標茶に養護学校の分校を

地域で学び育てほしい

同日「標茶町手をつなぐ育成会」と懇談し、現在の状況や思いを伺いました。

会員からは「標茶町の人口(8千人)を超える1万1618筆もの署名を集め、町長も一緒になつて提出した。教育長も親身に私たちの思いを聞いてくれてうれしかったが、その後の道の動きが全く見えず、これ以上どうすればよいかわからない」とやるせない思いが出されました。

佐野道議は「標茶高校の充実した教育環境を実際に見て、この学校で学び、地域で自立して生きていってほしいという皆さんの熱い思いが伝わった。地域の活性化のためにも道は、標茶町周辺のみでなく広域で児童生徒数を勘案し、設置を前向きに検討すべき」と話し、道に働きかける決意を表明しました。



標茶高等学校を視察する佐野道議
(右から二人目) 〓24日

シロシスト線虫被害

網走の農家から聞き取り調査

「ジャガイモシロシストセンチュウ」の被害について佐野道議は、菊地道議、松浦敏司網走市議らとともに4月26日、網走市の生産農家を訪ね、聞き取りを行いました。

2015年、網走市の一部の地域で、ジャガイモ等のナス科植物の根に寄生して植物を枯死させる「シロシスト」が、国内で初めて確認されました。農水省は「シロシスト」が発見されていない場所も含め防除区域を指定、生食用の出荷を禁止しました。

加工用は生食用の半値

生産農家は、「昨年9月に突然生食用ジャガイモ出荷を禁止され、価格が半値の加工用としての出荷を余儀なくされた。生産者側から単価を示すなどして補償額を決めるはず



ジャガイモ農家の聞き取り
佐野道議（中央）

が、国は一方的に昨年度の補償額を決定し、今年度は補償されない」「生食用は、病気が発生しないよう通常3年の輪作を4年にするなど、輪作体系土作りも加工用とは違うので、一時的に加工用を作るのは困難」と窮状を話し、「シロシストが出なかつた農地からの生食用出荷制限を解除するか、正当な補償をしてほしい」と要望を訴えました。

佐野道議は、「国は農家の実態をもっと理解するべき。国会議員とも連携していく」と話しました。

石北本線存続を

北見市長と懇談

25日佐野弘美・菊地葉子両道議は、JR北海道が単独では維持困難とした石北本線について、辻直孝北見市長を訪問し懇談しました。

佐野道議は、これまでの道議会での取り組みを紹介し、市長は「18市町村で、一致して石北本線・釧網本線を存続させようと話し合ってきた」と応じました。



石北本線で北見市長と懇談
佐野道議（右から2人目）

過労死を無くしたい

4月21日に、札幌市内のKKR病院に勤務していた新卒看護師の杉本綾さんの過労自死に関する「労災不認定取消裁判」の、第2回口頭弁論を傍聴しました。

80人の席を埋め尽くす傍聴者と、マスコミも数社が来ていました。

月の残業90時間の他に、自宅での深夜に及ぶ学習や準備、いわゆる「シャドウワーク」を労働とみなし、労働災害と認定するか否かが争点ですが、これを認めず争う姿勢の国の態度に強い憤りを覚えました。「新卒看護師の労災認定、裁判を支援する会」では、このような事が二度と起きないように、署名などの支援に取り組んでいます。

8月4日11時からの第3回口頭弁論は、多くの傍聴者で埋め尽くされることを願います。

福島への復興支援を

5月9日、原発事故からの復興を進める福島県の現状を調査するため、議員団として福島県を訪ねました。

飯館村の苦悩

避難指示が解除されても

一部地域を除いて3月31日に避難指示が解除され、帰還が始まっている飯館村を訪ねました。持参した線量計で測ると、モニタリングポストの2〜3倍の数値を示し、植え込みや側溝では10倍に跳ね上がる場所もあります。

村内に商店はなく、診療所も週に2日午前中のみの診療で、生活の不安もあります。帰還した住民は、「孫が毎年来て、バーベキューや山遊びで楽しく過ごした、あの楽しい

生活はもう戻らない」と無念さをにじませました。

一方、避難者は、指示避難から自主避難に変わるため、支援の打ち切りによる不安を抱えます。

帰還するか避難を続けるか、どちらを選んでも、差別や偏見にさらされることなく、必要な支援が行き届くことが望まれます。

「ゼロに向かったスタート」

菅野典雄村長と懇談

村長は「私たちの村はゼロからの復興ではなく、ゼロに向かったスタート。若い人や子どもらは戻ってきません。原発事故は異質の災害です」と顔を曇らせました。

かつての「日本一美しい村」は、放射性廃棄物が詰められ

たフレコンバッグが畑や沿道などに山積みになっており、この現状に胸がつかれる思いです。国の責任ある支援が必要と痛感しました。

福島を応援したい

福島県は全ての農産物、海産物などの検査を続けています。米は土壌改良などの努力により、現在ほぼ100パーセントが検出限界値以下です。お米やお野菜など、どれも大変おいしくいただきました。これからも福島を応援します。

原発ゼロの政治決断を

福島県は、県内の原発をすべて廃炉にし、2040年にはすべてを再生可能エネルギーで賄うという長期計画を推進しています。知事の政

治的決断があつてこそ、原発に頼らない再生可能エネルギー推進に道が開かれます。再生可能エネルギーのポテンシャルが高い北海道こそ、エネルギー政策の転換に大きく踏み出すべきです。



避難者の方々との懇談（右から菊地・真下・佐野道議）

道政報告

街頭から

16日は北区の9カ所で道政報告を行いました。

3月議会で、JR北海道や看護師の処遇改善、硫化水素対策などについて質問したことを紹介し、党派として道民の命・くらしを守る立場での予算の組替提案や、意見書の提案など議会活動について報告しました。

安春公園にて

29日、新琴似地域の花見に招かれ、道政報告を行い参加者と交流しました。

佐野道議は、JR北海道の地方路線存続に道が具体的に支援するよう、議会で求めたことを紹介し、高橋知事が「道民の声を受け止め、国に



道政報告に続き懇談する佐野道議 (左から4人目)

抜本的支援を求め、道の支援を検討する」と答弁したことなど道政について報告しました。

参加者から、これまでの議会活動についての意見や感想、激励が寄せられました。

フリースクール

19日菊地道議と「北海道自由が丘学園月寒スクール」を訪問しました。札幌市内で把握されている不登校者2千名の内、民間のフリースクールに通う児童生徒はごくわずかで、多くは教育を受ける権利から取り残されています。

学校への復帰を押しつけるのではなく、多様な学び方を保障する法整備が求められています。

塘路湖を調査

塘路湖の観光資源を調査し、改善してほしいとの要望があり、24日地元ガイドの案内を受けながら、地元標茶町議とともに現地を歩きました。

サルボ展望台からサルロン展望台にかけての遊歩道は、塘路湖をはじめ鉦路湿



説明を受ける佐野道議 (右)

原の沼や川を一望でき、また、堅六式住居跡やアイヌ民族にまつわる史跡なども多く、実際に歩いてみて、とても魅力的な場所だとわかりました。

海外からの観光客も多く訪れるそうですが、あちこちでベンチが朽ち、看板が外れてなくなってしまうなど、老朽化が著しく、改善が必要と感じました。

鉦路湿原の観光パンフにも必ず掲載される名所です。一日も早い改善が望まれます。